安積の歴史シリーズ

第35回　近代　製糸所や工場・会社の創立

柳田　和久（やなぎだ　かずひさ）
郡山市文化財保護審議会
委員

郡山絹糸紡績会社の設立

明治31年（1898）、永戸直之介・橋本清左衛門等が発起人となり、沼上発電所の電力を用いた郡山絹糸紡績会社を設立した。

このころ、日本国内でも紡績産業が盛んとなり、明治20年には京都に京都織物、大阪には同21年に倉敷紡績、22年に大日本紡績、25年に福島紡績が、29年には東京に富士紡績等が設立された。そのようななか、郡山に郡山絹糸紡績会社が設立されたのである。

郡山絹糸紡績会社は資本金40万円で設立した。明治43年の株主総数は128名で、そのうち100株以上の株主は第１表のように24名である。橋本万右衛門は1,078株を所有する筆頭株主で、次が580株の渋沢栄一である。安藤忠助・永戸直之介・甲斐山忠左衛門等は正製組の設立発起人、柳沼常八・斎藤久之丞等は真製社の無限責任者である。東京市の渋沢栄一等５名が株主となっているのをはじめ県内外や、真製社・磐城銀行・安積疏水普通水利組合等も出資している。

工場は堤下町（現　ヨークベニマル堤下店）に建てられたが、後に細沼（現　21世紀記念公園麓山の杜）に移設された。

第１表　株主名簿（100株以上）

株　数	府県郡市名	氏　　名
株 1,078	安積郡	橋本万右衛門
580	東京市	渋沢栄一
532	安積郡	安藤忠助
400	同	永戸直之介
400	同	甲斐山忠左衛門
400	同	柳沼常八
400	東京市	大倉喜八郎
378	田村郡	柳沼啓十郎
314	安積郡	根本祐太郎
210	同	斎藤久之丞
200	同	真製合資会社
200	東京市	浅野総一郎
150	安積郡	津野喜七
125	信夫郡	吉野要三
116	安積郡	永戸与七郎
113	同	岩麻積安治
100	田村郡	柳沼金五郎
100	福島市	青木金治
100	石城郡	磐城銀行
100	安積郡	安積疏水普通水利組合
100	東京市	手島秀一
100	同	佐藤甚兵衛
100	北多摩郡	南　尚
100	横浜市	渋沢作太郎

（『郡山市史』上395頁より引用）

発電所の設立

郡山絹糸紡績会社は、水力電気を用いて絹糸紡績を営むため、工場と発電所の建設を同時に進めた。

発電所は安積疏水を利用した。猪苗代湖の水が、沼上峠から瀑布となって五百川へ落ちる水力を利用したのである。そのため、安藤忠助等は、安積疏水組合に沼上瀑布の水利利用を願い出た。安積疏水組合では明治31年（1898）に発電所を設置しても疏水事業にはなんら支障はないとして許可した。許可が下りると直ちに工事に取り掛かり翌32年に完成した。沼上発電所である。

郡山絹糸紡績会社は、紡績部と電気部を設けて営業を開始した。創業時の発電出力は850キロワットで、沼上発電所から郡山までの距離約40キロを高圧送電するもので、長距離の高圧送電は国内では初めてのことであった。

長距離の高圧送電工事には野口遵等が参加している。野口遵は鴨緑江（おうりょくこう）発電所を建設し、電気事業や日本窒素肥料や旭化成等の創始者である。野口は東京帝国大学電気学科に在学中で、卒業論文の資料収集のため、郡山の親類宅に滞在し発電所建設工事の技術者として働いたのである。

工場・会社の進出

郡山絹糸紡績会社は、残った電気を販売したため、電気を使用する地元の工場をはじめ、県外から機械を備えた工場や会社が進出してきた。

明治33年（1900）に郡山精米合資会社が設立され、同38年に郡山たばこ製造所と須賀川たばこ製造所が設立された。翌39年に須賀川たばこ製造所は郡山たばこ製造所に併合された。同40年に郡山カーバイト会社が創立された。カーバイトは水と反応してアセチリンを発生するので、アセチリン燈の照明器具として使用した。カーバイトは石灰と木炭とを電気炉で2,000度に熱して作った。同45年には片倉組岩代製糸所が創立された。片倉組は長野県の製糸所で、大資本と新機械を装備して郡山に進出した。片倉組は仙台に製糸所を設けており、２番目として郡山に片倉組岩代製糸所を創設した。大正４年（1915）には福島瓦斯株式会社が設立され、町内点灯用・工業用・家庭用のガスを供給した。

第１次世界大戦が終戦となる前後から、紡績工場の他に化学工場も進出してきた。大正５年に小口組郡山製糸所・郡山電炉工業会社・東洋曹達郡山工場が設立された。小口組は片倉組と同様に長野県の製糸工場で、大資本と新機械を装備して郡山に進出し郡山製糸所を創設した。郡山電炉工業会社は、電極製造が目的で、電動機などの電流流入の導体等を製造した。東洋曹達は、現在の保土谷化学の前身で、金属ソーダ及び過酸化ソーダ等を製造した。

同７年には東邦製燐郡山工場・名古屋紡績郡山絹糸工場、同９年には仙台鉄道局郡山工場が設立された。仙台鉄道局郡山工場は、当初は機関車修理工場として大宮工場の一部を移設したが、のちに設備拡張して車輌の部分品の製造も併行して行うようになった。

第１図　現在の沼上発電所

発電所の増設

明治31年（1898）に設立した郡山絹糸紡績会社は、日露戦争後の恐慌により紡績部は停滞し、大正４年（1915）に片倉組岩代製糸所に紡績部を売り渡した。電気部はそのまま郡山絹糸紡績会社として営業を続けたが、翌５年に郡山電気株式会社と改名した。

電気の需要が増加するのに伴い、大正３年に、沼上発電所は発電増設工事を行い出力1,000キロワットに増設した。さらに、６年には福島瓦斯郡山支店を買収して、石炭ガスの供給事業を開始したのをはじめ、夏井川水電、常葉電気、郡山カーバイトを買収合併した。

第２表　主な会社・工場設立年月

創立年	名　　称	業　　務
明治13年	正製組	生糸
14年	真製社	生糸
28年	正製銀行	銀行金融
30年	安田銀行	銀行金融
31年	郡山絹糸紡績会社	生糸・電気
33年	郡山精米合資会社	精米及製粉
38年	郡山たばこ製造所	煙草製造
39年	安積精米合資会社	精米及製粉
39年	東郷綿工場	打綿
40年	郡山カーバイト会社	炭化石灰
	増子鉄板所	石油函板
	郡山整板所	角材及製板
41年	長島整板所	松割物
	郡山鉄工場	銅鉄鋳造
	岡田鉄工場	鋳鉄物
	和久屋精米所	製粉
	郡山牛乳合資会社	牛乳搾取
	橋本合名会社	貸金・物品販元
45年	片倉組岩代製糸所	生糸
	二本松銀行郡山支店	銀行金融
大正４年	福島瓦斯株式会社	ガス
５年	郡山電気株式会社	電気
	郡山信託	銀行金融
	小口組郡山絹糸所	生糸
	保土谷化学工業郡山工場	化学薬品
	郡山山丸乾燥場	生糸乾燥
	郡山電炉工業会社	電気化学工業品
	東洋曹達郡山工場	各種曹達
６年	橋本製糸所	生糸
	大日本紡績株式会社	絹糸紡績
７年	東邦製燐郡山工場	赤燐・黄燐
	名古屋紡績郡山絹糸工場	絹糸紡績
８年	郡山紡績	絹糸紡績
９年	片倉製糸紡績株式会社 岩代紡績所	絹糸紡績
	仙台鉄道局郡山工場	汽関車修繕
10年	郡山製糸所	絹糸紡績
12年	日東紡績株式会社郡山工場	絹糸紡績

（『郡山市史』４近代上390頁、５近代下66頁より作成）

大正８年６月には沼上発電所の下流に発電出力4,000キロワットの竹の内発電所を建設し、翌９年２月には石城郡川辺村四時川筋に、発電出力2,500キロワットの四時川発電所を建設した。10年には双葉電力、14年には茨城水力電気・川前電気と合併し、14年10月には大峯発電所（現在の丸守発電所）を建設した。

郡山電気株式会社は茨城水力電気株式会社と合併すると、東部電力株式会社と名称を変更し、資本金2,860万円の会社となった。本社を東京に置き郡山は支店となったが、経営は郡山が中心で、橋本万右衛門が社長、茨城の前島平が副社長に就任した。発電力は２万7,000キロワット、電力供給地は郡山・平を中心に、１市７町６カ村におよび、同時に都市ガスの事業を営む大資本の会社に成長した。

紡績工場の合併・吸収

明治の末から大正にかけて、長野県から片倉組・小口組や名古屋紡績等が、大資本と新機械を備えて進出し、明治45年（1912）に片倉組岩代製糸所、大正５年（1916）に小口組郡山絹糸所、同７年に名古屋紡績郡山絹糸工場を設立した。それに対し、地元の正製組・真製社・郡山絹糸紡績会社も、機械を導入するなど改善したが、大資本と最新設備の機械にはかなわず、大正２年に真製社は創業を休止した。同４年に郡山絹糸紡績会社は紡績部を片倉組岩代製糸所に売り渡し、同12年には正製組が営業を中止した。

橋本万右衛門は、真製社の事業を引継ぎ、大正６年に橋本製糸所を設立したが、昭和８年（1933）に松葉製糸所が引継ぎ、昭和10年に郡山製糸所となった。

明治45年に設立した片倉組岩代製糸所は、大正４年に郡山絹糸紡績会社から紡績部を買い取り、同９年に片倉製糸紡績株式会社岩代紡績所と名称を変更した。同12年に片倉組から独立し日東紡績株式会社郡山工場となった。

大正５年に設立された小口組郡山絹糸所は、昭和７年に三菱系列に移行し日東製糸株式会社郡山工場と改称したが、同11年に片倉系に再転し、片倉製糸紡績株式会社安積工場と名称を改称した。

大正６年に橋本万右衛門等は、大日本紡績株式会社を創設し生産を再開した。２年後の大正８年には郡山紡績株式会社と合併したが、大正９年に名古屋紡績株式会社に吸収され、名古屋紡績株式会社郡山絹糸工場となったが、同13年に日東紡績株式会社に吸収され、同社第２工場となった。

このように、明治13年に正製組、翌14年には真製社を創設し、地元資本家による座繰製糸が振興し、同31年には郡山絹糸紡績会社が電気を用いた

M14 真製社 ―改組― T6 橋本製糸所 ――― S8 松葉製糸所

M13 正製組（大正12年操停止）

M31 郡山絹糸紡績会社（紡績部） ―売却― T9 片倉製糸紡績岩代紡績所 ―独立― T12 日東紡績郡山工場（日東紡績第１工場）

T5 小口組郡山絹糸所 ――― S11 片倉製糸紡績安積工場 ――― 片倉工業郡山製糸所

T6 大日本紡績 ―合併― T8 郡山紡績 ―吸収― T9 名古屋紡績郡山絹糸工場 ―吸収― T13 日東紡績郡山工場（日東紡績第２工場）

S12 日東紡績富久山工場

第２図　主な製糸・紡績社の変遷図

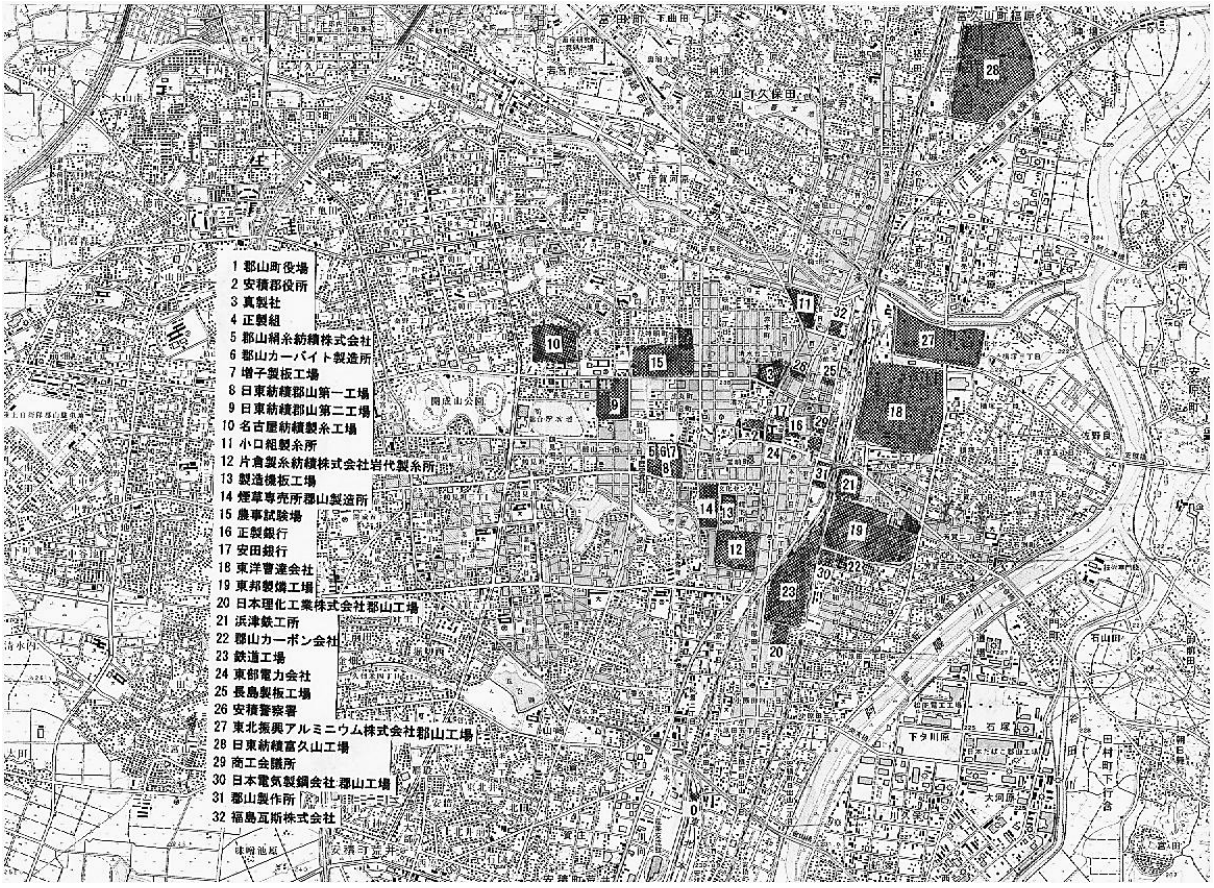
機械製糸に成功した。

郡山絹糸紡績会社は、残った電気を販売したことから、各種の工場や会社が設立され、郡山は近代の工業都市としての様相を示し始め、第１次世界大戦を契機に化学工場が設立され、郡山は紡績の町から工場の町として発展した。

しかし、地元の製糸工場は、長野県の大資本と新機械を装備した片倉組・小口組に吸収されていったのである。

（参考文献）

『郡山市史』３近世（下）、４近代（上）



第３図　主な会社・工場の位置図